

ほんやくくしんだん 2 : 連城の玉 (『蘭学事始』)

『蘭学事始』は江戸時代の蘭学医（オランダ流医学の医師）杉田玄白（1733-1817）の著作です。蘭学者としての自身の体験を中心に、蘭学の始まりから興隆に至る歴史を記録したものです。玄白が83歳の年、1815年（文化12年）に成立しています。

テキスト本文は、玄白とその仲間の医師たちがオランダ語の解剖学書『ターヘル・アナトミア』を漢文に訳し始めた時の体験を記した部分です。玄白らがこの書物の翻訳を開始したのは、1771年（明和8年）、玄白が39歳の時のことでした。この年、人体の「腑分」（解剖）を見学した玄白と仲間の医師たちは、『ターヘル・アナトミア』の解剖図が正確であることに驚嘆し、この書物の翻訳をおもた思い立ちます。

玄白らは、まず、人体の外側についての解説の部分から翻訳を始めます。ある日、「鼻」のところで、「フルヘッヘンド」という言葉が出てきますが、この言葉の意味がわかりません。当時はオランダ語の辞書もない時代でした。翻訳仲間のひとり、前野良沢が持っていたオランダ語についての小冊子を手がかりに、玄白らは「フルヘッヘンド」の究明に取り組みます。

なお、この「フルヘッヘンド」に当たる語は、『ターヘル・アナトミア』の「鼻」の解説にはありません。原著の「verhevene」という語を玄白が間違っ覚えていて「フルヘッヘンド」と書いたのだらうと言われていました。

ほんぶん しゅってん
本文の 出典 :

すぎたげんぱくちよ おがたとみお こうちゆう らんがくことはじめ いわなみしよてん ねんはっこう ねん
杉田玄白著・緒方富雄 校註 『蘭学事始』(岩波書店、1959年発行、1982年

かいほん
改版)